

<b>Title</b>	大澤研一著：『戦国・織豊期大坂の都市史的研究』：(思文閣出版 19 年 2 月刊行)
<b>Author</b>	小谷, 利明
<b>Citation</b>	市大日本史. 23 卷, p.138-143.
<b>Issue Date</b>	2020-05
<b>ISSN</b>	1348-4508
<b>Type</b>	Article
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学日本史学会
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University

【書評】

大澤 研一 著

# 『戦国・織豊期大坂の都市史的研究』

(思文閣出版19年2月刊行)

小 谷 利 明

本書は、大阪市立博物館、大阪歴史博物館において多彩な展示活動と研究活動を展開し、この程、栄原永遠男館長に替わり、重責を引き継ぐことになった著者が二十年を越える研究成果を集成し、新稿を加え世に問う論文集である。まず、本題に入る前に本書の構成を挙げておこう。

## 序章

### 第一部 中世大坂の歴史環境と都市

#### 第一章 中世大坂の道

#### 第二章 『日本一鑑』所収「滄海津鏡」の基礎的検討―十六世

紀大阪湾周辺の地形と港湾都市

#### 第三章 渡辺の都市構造

#### 第四章 中世上町台地の宗教的様相―四天王寺を中心に

#### 第五章 摂津国平野の成立と変容

### 第二部 寺内町の成立と展開

#### 第一章 真宗寺内町の構造と展開―山科寺内町を軸に

#### 第二章 蓮如の大坂進出の前提―浄照坊の動向を中心に

#### 第三章 大坂寺内の空間構造―古地形と町の観点から

#### 第四章 摂河泉における戦国期本願寺の地域編成

#### 第五章 中近世移行期における在地寺内町の動向

―摂河泉を中心に

### 第三部 豊臣大坂城下町の成立と展開

#### 第一章 豊臣大坂城下町の建設―初期を中心に

#### 第二章 文献史料からみた豊臣大坂城の空間構造

#### 第三章 文献史料からみた豊臣前期大坂城の武家屋敷・武家地

#### 第四章 豊臣期大坂城下町の寺町考―城南寺町を中心に

#### 第五章 大坂の陣後の町の復興と玉造地区の武家地転換

―高津屋史料の紹介をかねて

#### 補論1 「丁目」史料からみた豊臣大坂城下町の空間構造

#### 補論2 「石山」呼称の再検討―豊臣大坂城評価の観点から

#### 結論と展望

### 一 各論文について

本書は序章において、「十六世紀から十七世紀前半にかけて、大坂が都市としてどのような構造と特質を有し、どのように変遷を遂げてい

ったかを実証的に提示」すること、「わが国の都市史のなかにおける大坂の意義を明らかにする」の二点を課題とした。研究対象の「大坂の都市」については、大坂の中世都市、本願寺寺内町、豊臣城下町とする。これに関連して空間構造論を主題とした都市史や大坂の都市研究と個別都市の研究を挙げ、本書の構成とねらいについて解説する。

第一部は、上町台地とそれに通じる道や港津都市を検討し、渡辺・四天王寺・平野などの中世都市を分析する。

第一章は、大坂をめぐる歴史的環境を復元するための作業として大坂の道を検討したもの。上町台地南北道で最も活用されたのが台地西縁辺部の「浜道」で、渡辺津・四天王寺西海・住吉社を結ぶとする。

「浜道」は第三部の大坂城下町の建設にも関わる本書の重要な位置を占める。さらに、「河内御陣図」の分析から浜道の西に道があり、これを紀州街道に比定する。このほか上町台地東縁辺部の道や東西の道として上町台地と暗峠を結ぶ道を指摘した。

第二章は、中国の明時代後期の鄭舜功が弘治二年（一五五六）に倭寇取り締まりを要請する目的で来日した際の見聞をもとに撰述した『日本一鑑』について分析したもの。これに収められている「滄海津鑑」と称する台湾近海から九州・瀬戸内・京都に及ぶ広域地図を大阪地域史（摂河泉）研究に活用すべく同書の構成や記述を検討し、河川・港津都市・集落や橋・海賊など多様な内容を分析する。

第三章は、近年盛んとなっている渡辺及び渡辺党の研究を受けて、渡辺の都市構造を検討した。発掘調査と文献とを駆使して渡辺の空間

構造を提案する。

第四章は、上町台地の地形条件に密接に結びついた宗教的聖地である四天王寺に注目する。浄土信仰、舍利信仰、太子信仰などや、重源が設立した渡辺別所、熊野参詣、親鸞の太子信仰など信仰と周辺寺院との有機的関係性、摂河泉地域との宗教的結びつきについて整理する。

第五章は、都市平野の成立と変遷を発掘調査と文献から論じたもので、村の成立を十五世紀後半に求め、十六世紀後半を都市と評価する。都市空間と周辺の条里地割の方位のズレから、どの段階で何を契機として現在の都市空間が成立したかを問題とし、一部は十六世紀後半頃、一元化するのは大坂の陣以降、元禄七年の絵図段階の間とする。平野の都市形成は平野周辺に近接する複数の村が平野に結合したことで成立したとする。また、年寄家は、三好氏時代では徳成家（永禄期以降見えず）、成安家を中心であったが近世では七名家へと交代するなど、村の年寄は時代とともに変遷があったことも指摘した。

第二部は、本書では最も古いテーマで、大坂本願寺寺内町を分析するための研究である。

第一章は、本山系寺内町の画期を山科寺内町として、これに吉崎と大坂を比較する。本願寺は、銭貨を集積して経済の根源とし、このため、寺内町の経済特権が重要であることを導き出す。経済特権は山科時代から見られ、多業種にわたる商人・職人が現れる大坂寺内は商業・流通の拠点となり、大阪平野地域の都市のなかでも重要な位置を占めたとして大坂が中世の到達点とした。また、吉崎・山科・大坂の

空間構造の復元やそれぞれの寺内について評価した。

第二章は、蓮如による大坂進出の前提として蓮如の有力門弟が大坂に進出していた事例を河内国久宝寺慈願寺法円・法光父子の活動を中心に検討したもの。また、河内国出口にあった本遇寺も西成郡中嶋内福島に本遇寺門徒が進出しており、蓮如の大坂進出の「地ならし」となったとした。

第三章は、大坂寺内町の空間構造に関する研究を整理しながら、近年刊行された『大坂上町台地の総合的研究』による古地形・古環境の復元の成果を重視し、大坂寺内町の空間構造について詳細な復元案を提示した。規模は『貝塚御座所日記』から「七町ト五町」とし、山科寺内町の「内寺内」の規模に匹敵するとした。大坂寺内は六町から構成され、ほかに四町の枝町がある。親町六町も段階的に成立したと考えられ、古町を北町・西町・南町とした。また、各町の位置を文献で確認しながら地形復元で示されたデータと対応させて検討している。続いて大坂寺内の「町」についての社会的性格について検討する。「町」は大坂寺内の役負担の単位であり、「十六人番匠」という直参的な身分を有する職人集団に対して、従来町役を負担しなかったが、町役賦課に成功させるなど「町」側の論理が優先する事態となったこと。あるいは本願寺の宗教儀礼に経費を負担する講が「町」単位とする講集団に変化するなど、「町」という集団が都市を支える構造に切り替わったことを評価する。

第四章は、地域のなかの寺院・坊主・門徒は地域社会の論理と教団

の論理の狭間にあつて存在しており、両者を視野に入れた議論をするべきとして、ここでは教団の論理について本末的結集、直参的結集、与力的結集による分析を試みる。

第五章は、中近世移行期の政治的動向と寺内町の展開を検討する。織田信長と寺内町の関係については、武力弾圧と特権安堵が使い分けられており、一律な対応ではなく場合に応じた対応が行われているとされた。また織田政権が、禁制・掟類の宛所を「寺内」「道場」から「寺内中」「惣中」へと変化したことについて、仁木宏は共同体によって構成される都市へと変化したと評価したが、著者は武家権力が居住民と直結していくことに意義を見出している。豊臣政権期では、寺内町の経済機能および経済力を掌握、吸収していこうとする姿勢が見えるとした。徳川期については、関ヶ原の戦い後に禁制を得るのは、中世以来の在地寺内町であり、家康は在地の町場を積極的に掌握しようとした。また、慶長期には新設寺内町が多く登場しており、領主権が認められた事例が少なくないとした。最後に中世段階の寺院は、百姓には領主的性格を持ち、家来には主人的地位を持ち合わせたが、近世になると、領主的な性格や主人的性格も限定されるようになった。

第三部は、豊臣政権成立期の大坂城、城下町、武家地、寺町や大坂の陣後の町の復興と武家地転用について考察し、補論として「丁目」表記にある考古資料の分析や「石山」呼称の再検討を行う。

第一章は、羽柴（豊臣）秀吉が建設した大坂城下町の構想段階と実現したものを用いて検討すべきとして、構想と実現について整理す

る。城下町、寺町、町人地の構造を具体的に説明した。

第二章では、四期にわたる工事によって完成した大坂城は、本丸（内堀内）、二ノ丸（外堀内）、三ノ丸、惣構の構造をどう捉えるかで論争があり、著者は天正十一年～十三年に本丸普請、天正十四年～十六年頃に二ノ丸普請、文禄三年～五年頃に惣構堀普請による三ノ丸の出現、慶長三年以降、三ノ丸のなかに馬出曲輪と大名屋敷エリアが設定されると理解する。

第三章は、秀吉政権が全国政権へと段階的に成長していくなかで大坂の武家屋敷・武家地が建設されたことを考察する。また、奉行衆、大名衆、一門大名などの階層による分布も問題とする。

第四章は、我が国ではじめて設定された大坂城下町の寺町について分析する。寺町は天満寺町と城南寺町のふたつがあり、ふたつの寺町は配置に性格が違うことを指摘する。

第五章は、大坂の陣後の復興を担い上町の町割りを行い、堀跡の開発事業にたずさわった高津屋吉右衛門について紹介する。

補論1は、発掘調査で得られた上町および船場の「丁目」史料を検討し、京都の町名と違う「創出型」町名である「丁目」が、大坂で誕生し、新しい町づくりが開始されたとする。

補論2は、吉井克信によって「石山本願寺」という呼称は、中世では用いられず、「大坂本願寺」呼称が使われたとする研究を再検討し、大坂城築城による高石垣の多量の使用から「石山城」呼称が登場したことを指摘する。

最後に「結論と展望」では、各部分ごとに明確な結論を付し、最後に都市大坂の意義について論じる。

## 二 本書の意義と疑問点

本書は、長年にわたる大阪市内の発掘調査の成果を文献史学から裏付け、あるいは読み変えたもので、各時代の大阪及びその周辺都市の空間構造や都市間交通などが復元され、性格づけられた現在の到達点を示すものと言えよう。著書のタイトルには中近世移行期とあるが、論証している時代は古代から江戸時代初期まで長期に亘り、膨大な文献や考古学や歴史地理学・建築史学の成果を駆使したもので、これらを学び取ることは並大抵のことではない。これは日頃から多方面の研究者と交流してきた著者ならではの業績といえるだろう。

学芸員は、次から次へと展示テーマを変えながら研究するのが宿命であり、著者も大阪市立博物館時代では、市博のコンセプトが摂河泉地域をフィールドとする館であったため、摂河泉地域研究者として第二部を書いたはずである。大阪歴史博物館になると、上町台地を中心とする地域がコンセプトとなり、大坂をテーマの中心に置く研究者となった。本書は、二つの博物館の研究成果から構成されている。

まず気になったことは、本書の主題となる「大坂」の定義について、著者は序章注において「あつかう時代の用語に沿って「大坂」を使用する」とあり、これに従えばその主たる対象は、蓮如が開創した大坂御坊寺内町や大坂本願寺寺内町、豊臣大坂城下町に限定されると

思われる。ところが、大坂の個別都市研究として渡辺・四天王寺・平野・大坂寺内町を挙げ、「大坂」が何を指すのかわからなくなった。これらの都市は、後に豊臣大坂城下町に組み込まれ、あるいは移動させられた都市に該当する。「大坂」は、豊臣期大坂城下町を祖型としてそれから時間を遡って概念化したものか判断に迷う。あるいは「一般表現で「大坂」を用いる」とする「大坂」＝大阪市なのか。

これとは別に上町台地上にある住吉の扱いがなかったことも気になった。河内国石川郡観心寺は畠山政長から判物を得るために行動した場所を見ると、若江・古市・京・堺・住吉であった（拙著『畿内戦国期守護と地域社会』）。『蕉軒日録』でも畠山義就と住吉住民との関係は深い。河内からみると、住吉は重要な都市と考えるのだが如何だろうか。

次に政治史を専門とする評者としては、政治的に本書を読むと、もう少し深掘りできるのではないかとの感想を持った。例えば、草野顕之（「北陸における本願寺一家衆の動向」『真宗教団の地域と歴史』）は、加賀本泉寺が「田舎の本寺」と言われるように北陸教団の中心であり、本願寺に替りうる力を持つ寺院であったと評価した。これによれば、すくなくとも永正十六年の一門一家制までは本願寺の地域編成は、一律のものではないことがわかる。大坂御坊の場合、河内錯乱、大坂一乱でまさしく本願寺に替るべく摂河坊主・門徒が動いた。本願寺教団は、複数の地域教団の集合体として整理する必要がある。この問題について著者は寺院・坊主・門徒は地域社会の論理と教団の論理

の狭間にあるとするが、大坂御坊自身の「教団の論理」も本願寺とは違うのである。永正二年と推定される九月十日付蓮淳書状（『武州文書』）に「此間細川家中、同両畠山取合、大篇可及合戦候、（中略）大坂殿万一三好得勝利候者笑止と案入候、畠山よく候ハバ安堵候」とあり、河内錯乱期に近江にいた蓮淳が大坂殿実賢の政治活動を批判した部分を引用した。これは北西弘（『二向一揆の研究』）によって永正十七年に比定されたが「大坂殿」と呼ばれる人物は実賢しかおらず、永正二年に間違いない。これから見ると、大坂殿実賢は山科本願寺とは全く別の政治勢力との連携を図っていた。恐らく、大坂時代の蓮如も細川政元一辺倒ではなく、大坂においては畠山氏との関係を重視したに違いない。「大坂」形成史を考える上で、大坂への摂河坊主門徒の集みだけではなく、大坂での蓮如及び実賢がどのようにこの地域の政治状況を受け入れていたかは考慮されねばならないだろう。

これは、大坂本願寺内町の問題とも通じる。大坂御坊体制から大坂本願寺体制への転換時に大坂六人坊主の力が弱まったことは、草野顕之の研究（『戦国期本願寺教団史の研究』）などで明らかだが、著者が問題とする大坂の「十六人番匠」という直参的な身分を有する職人集団も、大坂御坊体制時代の存在である。彼らの特権が否定されたのは、体制の転換期とみると、「町」側の論理だけでなく、別の評価も必要に思うがどうかだろうか。また、「寺内直参衆」十人が北町などに大きく偏っていることを指摘するが、山科本願寺寺内町からの移入者と想定すると、特定の町に偏る可能性も考えられよう。大坂御坊体制

から大坂本願寺寺内町への変化は、従来の摂河教団的性格に全国の教団を束ねる本願寺の中心地へと、二重の性格が付与されたことになる。これは大坂御坊時代の特権集団の否定や「町」という地縁集団の台頭という結論だけでなく、ふたつの性格の併存についても考える必要がある。これは初期の豊臣大坂城が羽柴秀吉という摂河大名の居城であることと、全国政権の居城であることの二重の意味を考えることと同じである。

また、天文期の大坂本願寺周辺には、細川藤賢の堀城（中島城）、三好宗三の榎並城、江口城などの城郭があった。元亀元年の信長の大坂攻めでも藤賢は堀城に入ったことがわかるが、大坂とこれらの城との関係も問題とすべきではなかったか。更には、豊臣大坂城が武家政権の城であることからそれ以前にあった地域政権の居城高屋城や八尾城などの城との関係も必要であろう。

史料についてであるが、第一部及び第三部で重要視された「浜道」が上町台地の歴史を考える上で大変重要な道であることは理解できた。ところが、「浜道」とその西側に続くとする「紀州街道」を問題とするとき、著者は「河内御陣図」から分析している。この史料は、従来、モノクロ写真しか見ることができず、一時期閲覧ができない状態が続いていたが、このほど『八尾市史』古代・中世資料編が刊行され、カラー図版で参照することが可能となった。ここでわかったことは、御陣図は、墨線と朱線によって描き分けられ、墨線が河川、朱線が街道を表していた。著者がいう「紀州街道」は、墨線に当たり、ど

うやら海岸線を描いたものと見られる。大村拓生との論争があるところなので、もう一度検討すべきだろう。

以上、誤読誤解があることを恐れるばかりで、つたない書評を終えたい。最後に私的なことだが、著者は評者より年齢は若いが学芸員としての先輩であり、調査研究の上で常に指導いただき、学芸員とはどうあるべきかを教えていただいた。今後は大阪を代表する博物館館長として活躍することを願うとともに、多様な研究活動をさらに発展させることを期待したい。

（八尾市立歴史民俗資料館）